

## 個人研究報告

### 「日本興業銀行の成立過程について」

#### 問題関心

堀雅昭『杉山茂丸伝』の中に、日本興業銀行創設の章があった。杉山は国内で工業に対し低利で長期資金を貸し付ける工業銀行設立のために当時の金融王 JP モルガンに交渉した。モルガンとの契約にこぎつけたものの帰国後日本で反対にあい、契約は破棄された。その後紆余曲折の上同銀行は設立された、との趣旨であった。以前に金子堅太郎『自叙伝』にも興銀設立運動当時の話があり、本人は当初日本興業銀行期成同盟の会長だったにも関わらず外資輸入を反対され不服のうちに結局辞退したのを思い出した。またモルガン家についての本も読んだことがあったので(杉山の話は載っていないが)、同財閥が当時(19世紀末)時点で日本側とそのような約束をしてくれたという点に驚いた。そこで

- ・これほどの財閥との折角の機会を反故にしたのはなぜか
- ・それほどまでに揉めた原因はなんだったのか
- ・起案者が不服として投げ出したような案がなぜ、どのような形で成立し、結局興銀とはいかなる銀行として機能したのか

などの点が気になったので、興銀の設立時の事情について調べてみることにした。

#### 日本興業銀行とは

松方正義の銀行分業論の中で、フランスのクレディ・モビリエ(Crédit Mobilier)に範をとったとされる特殊銀行。工業に対する長期資金貸付、有価証券取引の助長、外資導入の促進、信託業務などがその目的とされた。しかし当初期待された有価証券担保金融は伸び悩み、外資導入にしても目立った成果を挙げ得なかった。その後の法改正によって手形割引や財団抵当貸付、そして拡大された信託業務などを通じ恐慌時の救済や植民地への資本輸出方面で政府金融機関として活動。戦後普通銀行に転向し富士銀行に吸収され解散。事実上興銀から個人向け業務と金融債業務を移したのがみずほ銀行。

#### 興銀の設立

銀行分業論に基づいた(少なくとも模範にした)長期工業資金貸付業務が主目的であったが、政府保証による外資導入論と結びつくことによって財閥の反対を受け、議会で揉めた。結果中途半端な状態(当時骨抜き法と言われた)で設立され、その役割や機能は後に変化・確立していった。

#### 先行研究概要

■掛谷宰平 「日本帝国主義形成過程における日本興行銀行成立の意義」『日本史研究』75号(1964年)  
 興銀は絶対主義、帝国主義的な官僚と、それに組織されたブルジョワが掌握。1905年の改正で当時実現しなかった日清銀行の役割に転向することで、以降外資導入と資本輸出の国家的金融機関としての興銀の役割が数年にわたって確立。

■波形昭一 「日本農業銀行と外資輸入」『金融経済』117号(1969年)  
 政府(松方)の銀行分業論における興銀(動産銀行)はあくまで有価証券に深入りしてしまっている普通銀行・日本銀行の肩代わりに過ぎない。その比率が単に工業によっているというだけのこと。一方で金子ら期成同盟案における分業とは工農商それぞれを専門に扱う銀行という意味で、両者は根本的に相容れない。

したがってそうした政府の意向を受けて成立した興銀は外資導入のための機関ではなく、銀行組織全体の整備計画の一端を担う役割にすぎない。政府筋は銀行制度が整備されれば外資導入がなされ国内資金欠乏問題も解決すると踏んでいた。一方で民間経済界は外資の導入によって国内資金欠乏を埋めようとした。

このように民間・政府共に理念や制度に食い違いはあれど外資導入の必要は認めており、そのために興銀の設立は切望されていた。

■浅井良夫 「成立期の日本興業銀行—銀行制度の移入とその機能転化に関する一考察—」  
 『土地制度史学』68号(1975年)

興銀設立に関しては、政府による興銀特権が国内普通銀行(特に財閥銀行)が不利になるという理由で財閥ブルジョアを中心に反対されており、その反対のために興銀構想の親である松方の手で「骨抜き」法案にされた。期成同盟の中心は全ブルジョワではなく小中産業資本家、それに官僚の指導が加わったものである。

政府の動産銀行案はその役割を非常に限定するものであって、その設立が切望されていたとは考えにくい。それでも一応形だけの法案を可決したのは与党との妥協と考えられる。

その後の興銀の機能転化を考察。戦前まで一貫して支配的資本である財閥資本に対して補完的。

■関連年表・各法案の要旨など(上記論文を主に参考にして作成)

	M14	条約改正問題 明治十四年政変で大隈の外債募集論が排斥 →以後日清戦争後まで事実上の外貨排除政策 松方正義「財政議」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・銀行分業論による特殊銀行構想</li> <li>・産業金融に日本銀行・国立銀行、海外取引を横浜正金銀行、農業工業それぞれに専門銀行。</li> </ul>
	M18 ～ 19	起業勃興ブーム→資金需要が急増、投機的な株式ブームに銀行が深入り 政府・民間共に資金欠乏感

1890	M23	<p>金融逼迫と金利急騰・米価騰貴などによる恐慌勃発</p> <p>日本銀行：民間銀行の資金援助のため担保品付手形割引制度→負担へ  民間銀行：株式ブームに深入りしすぎかなり逼迫  国立銀行は破綻など(もともと産業金融のための銀行だったため)  →政府・民間ともに資金が株式金融に固定している(=流動性が低い)ことが  問題であると認識。いずれにせよ外資輸入によって資金不足を補うことが  必要だと言われる。</p> <p>松方「動産銀行構想」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不動産抵当金融のための興業銀行、農業のための農業銀行、製造工業運輸等の  事業のための動産抵当金融を行う動産銀行を設立して殖産興業に当てる。  (分業論)</li> <li>・フランスのクレディ・モビリエ定款のほぼ直訳といわれる。</li> <li>・外貨輸入にはそこまで強い意欲が見られない。</li> </ul> <p>その後金融が緩和していくに従い一旦このような動きは沈静化。</p>
1894 1895 1896	M27 M28 M29	<p>日清戦争  下関条約・三国干渉  日英新通商航海条約  →不平等条約の一部改正により植民地化の不安なしの外資輸入が現実化</p> <p>日清戦後経営  政府の基本方針：軍拡</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・公債の海外売却に積極的、また当初は外資導入には消極的だったが次第に外  資導入、またそのための貨幣・金融制度に関心(→金本位制設立、松方)</li> <li>・一方民間経済界では軍拡のみならず公債償還で国内にも資金を回すよう強く  要望。軍事関連産業は発達(=財閥資本の形成)</li> </ul> <p>松方(2)内閣成立  金本位制の確立</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>→ロンドンを中心とする金融市場に参加しやすくするため  (銀本位制では信用がないため)</li> <li>→政府は外資導入を積極的に行ったが、結局は軍拡資金に流れてしまい国内資  本はやはり不足</li> <li>→対清(銀本位)輸出が減少、恐慌の原因へ</li> </ul>
1897	M30	<p>日清戦後恐慌(1)  →民間中心に、外資導入を求める動きが再び激化</p>

1898	M31	<p>1月</p> <p>5月</p> <p>6月</p> <p>10月</p> <p>11月</p>	<p>伊藤博文(3)内閣成立 蔵相：井上馨 農商相：後に金子</p> <p>金子堅太郎「帝国興業銀行案」(農商相)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ニューヨークのモルガン商会より外資導入をすることによって、日本の銀行より低利で工業に対して長期の資金貸付を行う。</li> <li>・外資導入にあたって政府保証を与える。</li> <li>・伊藤、井上に興銀による外資導入案は国内銀行の反対が強いため議会に出せないと説得される</li> <li>・次期蔵相松田正久・次官添田寿一に引継がれる。</li> </ul> <p>大隈重信(1)内閣成立(憲政党) 蔵相：松田(憲政党)</p> <p>政府、農商工高等会議に興銀案について諮問</p> <p>→財閥や鉄道資本家の反対</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・政府特権を与えられた興銀による外資導入では国内の(財閥)銀行が不利</li> <li>・低利長期貸出を興銀が行えば工業界が興銀の傘下になる恐れ</li> </ul> <p>*農商工高等会議：農商務省諮問機関。財閥ブルジョア・商工会議所代表が主、その他学者や官僚など</p> <p>勸銀総裁「動産抵当銀行案」→興銀の必要を説く</p> <p>松田正久蔵相「動産銀行案」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金子案と松方の銀行分業論の折衷案</li> <li>・松方の動産銀行構想に加え、政府保証を骨子とし、動産銀行設立を外資導入の必要から説く</li> <li>・内閣瓦解にともない議会上程されず</li> </ul> <p>山県有朋(2)内閣成立、蔵相：松方</p>
1899	M32	<p>1月</p> <p>2月</p>	<p>日本興業銀行期成同盟「日本興業銀行設立旨趣書」</p> <p>*期成同盟：由利公正・金子を筆頭に中小ブルジョワジー、その他憲政黨員を中心とした議員など</p> <p>憲政党 政務調査会「動産銀行案」→動産銀行設立を容認</p> <p>松田ら興銀期成同盟を中心とする議員「日本興業銀行法案」</p> <p>→第13議会へ提出</p> <p>政府「動産銀行法案」→第13議会へ提出</p> <p>第13議会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同盟案では興銀の特権を積極的に規定、一方政府案は最低限に規定。</li> </ul> <p>→衆議院・貴族院共に政府保証の是非について議論が集中。</p> <p>→財閥の猛反対を受けた政府が賛成議員の切り崩しにかかり、貴族院では保障条項否決。</p> <p>第13議会閉会のため、上記2案とも未成立</p>

		10月 12月	<p>株価下落など→民間で再び外資導入銀行論が盛り上がる。</p> <p>政府「日本動産銀行法案」→第14議会貴族院へ提出</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・期成同盟は独自案を出さず、政府案に保証条項を挿入させる方針をとる。</li> </ul>
1900	M33	2月 3月  10月	<p>第14議会で日本動産銀行法案可決</p> <p>「日本興業銀行法」公布</p> <p>※外国における債券発行については別に規定すると但書規定</p> <p>伊藤(4)内閣</p> <p>日清戦後恐慌(2)</p> <p>→興銀設立準備難航、当初政府保証がないので外資導入が難しく、また政府公債を資本金にすることも認められなかったため日銀や大蔵省預金部の助けを得て資本集めを行った。</p>
1902	M35	4月	<p>日本興業銀行開業</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・業績は振るわず。興銀内部から法改正運動。</li> <li>・興銀設立運動と同時期に審議されていた日清銀行案(廃案)から日清銀行の役割を引き継ぐ方向に議論</li> </ul>
1904	M37		日露戦争
1905	M38		<p>日本興業銀行法改正</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同時に社債制度、各種抵当制度、信託制度なども改正され、興銀の「工業銀行」としての一定の発展の可能性と海外業務に関する特権を与えた。</li> <li>・その後、興銀は本来の工業銀行ではなく植民地投資機関に転化、第一次世界大戦後は財界救済の役割を得た。いずれも財閥資本を補完し、政府金融機関・資本輸出機関としての働きを求められた。</li> </ul>

### 先行研究の問題点／疑問点等

1. 金子案の元となった、モルガン家からの融資契約について触れられている部分がほとんどなかったのが個人的に疑問。それほどの魅力的な条件・機会ではなかったのか、それ以上に国内銀行の反対が強い、または国内銀行の保護が必要だと政府は判断したのか。
2. 杉山や金子は帝国工業銀行についてアメリカの低利工業銀行を参考にしたとあったが、同案はフランスの分業論を支持していた政府とこうした面からも食い違いが生じたのではないか。
3. いずれにせよ興銀は設立当初から果たすべき明確な役割があったわけではなく、その後徐々に必要に応じてその機能を変化・転化してきた。政府も勸銀に比べて設立に積極的だったとは思えない。銀行分業論における動産銀行は、日本においてはそもそも不要だったのか、なぜ不要だったのか。

## 今後の方針など

- ・銀行分業論や勸銀についてほとんど調べられていないので、まずこれらについてもう少し調べてから上記の2や3について再度考察してみたい。
- ・1についてが一番個人的には気になるが、方向性は未定。
- ・今回はほとんど先行研究を調べるだけで終わってしまったので、正直あまりこれと言った疑問や主張したいことが見つけられませんでした・・・

## <文献リスト>

- 掛谷宰平 「日本帝国主義形成過程における日本興行銀行成立の意義」『日本史研究』75号(1964年)
- 波形昭一 「日本農業銀行と外資輸入」『金融経済』117号(1969年)
- 浅井良夫 「成立期の日本興業銀行—銀行制度の移入とその機能転化に関する一考察—」『土地制度史学』68号(1975年)
- 杉山和雄 「第一次世界大戦の開運金融政策—興銀の船舶金融をめぐって—」『成蹊大学経済学部論集』24号(1993年)
- 日本興業銀行年史編纂委員会 『日本興業銀行百年史』(2002年)
- 原 郎 『日本経済史=現代経済の歴史的 premise=』放送大学教材(1999年)
- 石井寛治 『日本経済史』東京大学出版会(2009年)
- 堀 雅昭 『杉山茂丸伝<アジア連邦の夢>』弦書房(2006年)
- 金子堅太郎 『金子堅太郎自叙伝』日本大学精神文化研究所(2003年)